

S-face

SFC makes the future through researches

建築や都市デザインを 人間に取り戻す試み

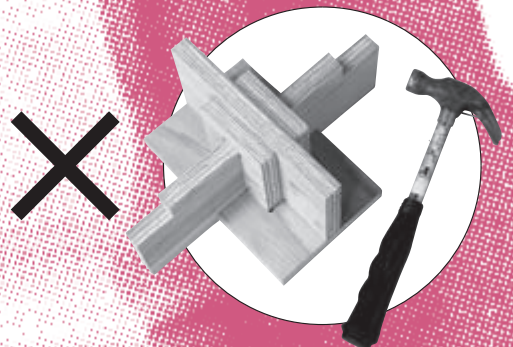
小林 博人

VOL.

006 /100

2015.Aug 発行

和の色:はまなす色



課題をヴィジュアルライズして造る 建築や街

建物や都市を取り巻く環境は、物理的な側面だけではなく、社会や文化的な側面の理解なしには考えることはできません。
一方で21世紀に入り、私たちの生活環境はますます複雑な様相を呈し、人と建築、人と街との関係性は次第に希薄になっています。
建築や都市は、単なる人的なネットワークだけで成立しているのではなく、その場所や建物と、人とのかかわりの中で成立します。
小林博人教授の研究は、人間と建築、そして街というコミュニティの関係性の回復を目指し、その新しい姿を見据えています。

今、求められている “巻き込む”デザイン

私が建築やまちづくりに携わるようになって、30年近くが過ぎました。建築デザインや都市デザインに取り組むほどに強く感じるのは、建築や都市は技術の高度化や専門化によって、次第に技術や規模が、人間という存在から離れてしまったということです。本来、そこに人が住み、暮らすはずの建

築や都市が、個人や社会にとって、どのような意味を持っているかがあいまいになり、人が関心を抱かなくなっていました。これは個人の生活や地域社会の形成において、大きな問題になりかねないことです。
かつて、村人たちが集落の家を一軒ずつ協力しながら建てていた時代は、そこに住もう人は自分たちの家の構造を理解し、その修繕も容易でした。コミュニティのつながりも、今よりはるかに強固なものだったでしょ

う。しかし、現在の建築やまちづくりには、こうしたプロセスがありません。
建築や都市をデザインし作り上げていくためには、その場所にどんな問題や可能性があるのかを理解した上で、それらをヴィジュアルイズ(可視化)し、住む人や暮らす人が自ら関わることのできる“巻き込むデザイン”を行うことが重要です。それにより、建築や都市を人やコミュニティに近づけることができると考え、その手法を開発することが、私の研究テーマなのです。

ベニアハウスにより 建物と人の距離を縮める

2011年の東日本大震災以降、プロジェクトとして取り組んでいるのが、森林の活性化を促進する間伐材から作られた合板を用いた、「ベニアハウス」という簡易セルフビルド建築のデザインです。
これは合板をあらかじめカットしておき、それらを利用者自らが組み立て建築物を建てることで、建築とその利用者との距離を縮めることを目論んでいます。これにより、建築物を“自分の建物化”することを目指しているともいえるでしょう。
合板は反りがなく、寸法が正確であるなど、建築資材として非常に優秀です。森林の間伐材を材料としているので、環境にもやさしい素材です。さらに、たとえば東日本大震災の被災地である東北地方には山地が多く、合板の生産は地場産業でもあります。
こうした点から、ベニアハウスは地域を活性化し、山林の環境保全にもつながりま

す。しかもコストは廉価で、デジタルファブリケーション^(※)によるカット技術によって、従来は熟練の職人にしかできなかった、複雑で高度なカットも容易にできるようになっています。
ベニアハウスは、東日本大震災の被災地に2軒、ミャンマーに1軒、フィリピンに1軒建設されました。2015年度には、地震で大きな被害を受けたネパールへの復興支援として、ベニアハウスを送るとともに、現地での生産体制を構築することを目標に活動しています。
※レーザーカッターや3Dプリンタなどコンピューターと接続された工作機械を用いて、デジタルデータをもとに素材を加工し、成型する技術のこと。

い、その地域固有の文化(微文化)や伝統のすばらしさを見つけ出し、気づきを促すことができます。あるいは、建築や都市デザインの新しい方法をもちいて、地域の伝統や微文化を尊重しつつ、先進的な解決方法を示し、問題を解決することができます。
その協働を通じ、技術を伝達することによって、地域の人たちやその地域に貢献できると考えています。こうした微文化と先端的な方法論の融合を目指し、日々、研究に取り組んでいます。
世界のさまざまな地域に異なる微文化があり、多様なライフスタイルがあります。それらを尊重しながら、同時に私たちの知見を活かし、地域固有の住環境に関する問題解決を行っていく。そのために、近年身近になってきたデジタルファブリケーション技術を活用し、かつては熟練した職人しか造ることのできなかったディティールを自分たちで加工し、誰にでも楽しく建築ができる環境作りを行っていくことが、今後の目標です。

Veneer House ベニアハウス

最新のベニアハウスでは、デジタルファブリケーション技術の活用により、従来は長時間かかったカットの作業が数時間でできる。部材の結合部は釘を使わず楔(くさび)で固定するなど、日本の伝統的技術も活かされている。



Minamisanriku 南三陸



南三陸ベニアハウスは、東日本大震災の被災地で地域の人たちが気軽に立ち寄れるスペースとなるよう設計・建築。地域の間伐材から作られた合板、特に直接津波を被った被災合板を主に使い、地元住民と本学や他大学の学生らによって建てられた。

Philippines フィリピン



フィリピンで建築されたベニアハウスは、地元産の合板に加えて現地で用意できる竹を外壁などに使用。地元で育った建材である竹は、その土地の風土に適し、耐久性も高い。使い慣れた建材なので将来の修繕が自分たちでできるというメリットを持つ。

Congo コンゴ



SFC^(※)の長谷部葉子研究会とのコラボレーションとして、コンゴ民主共和国での学校建設のプロジェクトにも参画。ここでも地元で調達できる素材を活かし、現地の人を“巻き込み”ながら建築することが重要だと小林教授は強調する。
※慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス

詳しくはWebサイトへ

詳細インタビューや動画も
ご覧いただけます

S-face

検索



慶應義塾大学SFC研究所
慶應義塾大学 湘南藤沢事務室 学術研究支援担当
〒252-0882 神奈川県藤沢市遠藤5322
Tel: 0466-49-3436 (ダイヤルイン)
E-mail: info-kri@sfc.keio.ac.jp